

これからの「公共」について

—人文系私設図書館 Lucha Libro の活動から—

青木真兵

2016年4月、私たちは兵庫県西宮市から奈良県東吉野村に移り住みました。移り住んですぐに自宅を私設図書館（人文系私設図書館 Lucha Libro、以下ルチャ・リブロ）として開き、現在も活動を続けています（写真1）。まず、2012年に出版された『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』¹⁾で語られている、博物館の現状と課題について共有しておきます。



写真1：橋を渡って正面には史跡があり、史跡を逸れて林を抜けると当館。

現代の地域博物館は、岐路に立っている。国内の多くの館園が予算削減や人員削減などを経験していて、博物館の整理統合や指定管理者への運営委託など、公立博物館の存続そのものが当然のように議論されるようになった。“コレクションは市民の財産だ”とか、“博物館は生涯学習の基盤だ”など、地域博物館の存在意義を声高に訴えても、その主張は必ずしも市民の心に届いておらず、対費用効果や入館者数に偏重した事業評価などの議論のなかで雲散霧消してしまうのが現状である。（加藤幸治、141ページ）

加藤氏が述べるように、「博物館の存在意義」が社会全体に共有されていないと感じる方は多いのではないのでしょうか。私もその一人です。しかしその価値が社会全体に共有されていないと感じるのは、博物館に限ったことではありません。現代では、文化、教育といった、結果が出るまでの変化が緩やかだったり、そもそも数値化とは馴染まない事柄に対しても、「対費用効果や入館者数」によって成果をカウントしている傾向が強化されています。ここでは、人口

約1700人（2021年現在）の山村に住み、図書館活動を行いながら考えた「公共とは何か」について報告します。

ルチャ・リブロの開館日は、月に10日前後です。主に月曜日と火曜日が開館日で、また隔週で日曜日を開けていますが、毎月の詳しい開館日などの最新情報はホームページで発信しています。また12月中旬から3月中旬までは冬季休館としており、年間の開館日は90日程度となっています。来館して本を読んでいただくだけの利用は無料です。本を借りる場合には会員カードを作成料500円で作っていただきます。遠方の方でもカードを作成いただければ、貸出は可能としています。現在がコロナ禍ということもあり、貸出は2ヶ月、1人3冊までとなっています。また本の貸出は「サービス」としてではなく、「おすそわけ」という意識で行っています。トークイベントなどを開催することもあり、その場合は有料です。来館者は村に移住者してきた方だけでなく、奈良県内外などから、年間500人程度の方にご来館いただきました。その中で計200件の貸出があり、会員数は2021年7月現在200名程度となっています。（写真2）

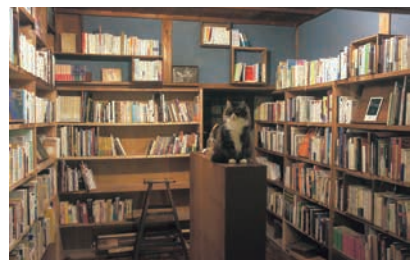
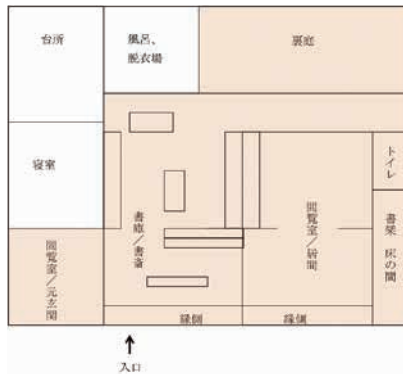


写真2：館内書庫の様子。真ん中にいるのは当館館長のかぼす。

先述のとおり、ルチャ・リブロは自宅を図書館として開いて運営しています。自宅という「私有」の空間と図書館という「共有」の空間が混ざり合っているともいうことができますし、どう呼称するかによって家の役割が変わるということでもあります。図書館を閉めているときは完全に自宅なので、閲覧室で食事をとったり、



間取り図：色をつけているところが共有している空間。書庫は書斎、閲覧室は居間や元玄関でもある。この空間は開館／閉館を通じて、共有／私有が切り替わる。



写真3：当館閲覧室の様子。ここに本を持ってきてくつろいでもらっている。

ゴロゴロしたり、原稿を書くこともあります。一方、図書館を開けているときは、図に示したように自宅の三分の二程度を開放しているため、私有空間は共有空間に変わります（間取り図）。店舗や神社仏閣でも住居部分（私有空間）と店舗部分（共有空間）が隣接している場合がありますが、ルチャ・リブロの場合は二つの空間が干渉し合っています。この生活自体を「図書館」と呼んでいます（写真3）。

さて、山村で暮していると、公共への考え方が都市とは異なることに気が付きます。東吉野村に越す前までは神戸市や西宮市に住んでいた私たちも、公共とは「行政の管理下にあること」を意味していると思っていました。しかし東吉野村に住んでみると、公共への考え方が変わってきました。例えば、地域の行事として共同墓地の清掃活動や周辺道路や公園のゴミ拾い、近所の馬頭観音祭の準備などがあります。地域の方々がそれらを担うことが、公共につながっている。人口が少ないことも相まって、公共と私たちが地続きなの分かります。

この背景には、都市と山村の成り立ちの違いがあると思っています。基本的に都市は人が住むために設計されていて、あらゆるものが交換

可能です。あらゆるものが交換可能ということは、何でも買うことができるということです。つまり都市ではすべてが商品になっています。一方、山村ではどんなにお金を払っても交換できないものがあります。それが代々受け継いできた家や土地です。これらの先祖から受け継いできたものは、商品ではありません。

2000年代後半に始まる橋下徹大阪府知事（後に大阪市長）時代の新自由主義的政策は、社会を都市的価値観に偏らせるものでした。そしてこれらの政策が支持された背景には、公共財が自分たちのものではなく、「誰かのもの」と府民や市民が思っていたことがあるのだと思います。「誰かのもの」の価値を測るためには、最も万能な尺度は商品としての価値です。だから、商品としての価値がなければなくしても良いという、乱暴な論理がまかり通るのです。しかし商品として価値があるかどうかで、公共財の価値を判断してしまうことはとても危険です。

そういう意味で、私たちの図書館活動は「公共」を問い直す試みです。問題意識の根底には、私たちはどうすれば公共を自分ごととして扱うことができるのか、というものがあります。そのためには「公共」のなかに、商品としての価値だけではなく、「交換できない価値」を含むことが必要なのではないのでしょうか。山村の場合、それは「先祖代々受け継いできた」というものになるのですが、あまりに歴史と文化財が結びつき過ぎることによって、排他性を含んだナショナリズムに利用されてしまう危険性もあります。

山村で自宅を開いて図書館活動を行うことは、現代が一つの価値観に偏り過ぎているのではないか、という示唆を私に与えてくれました。公共を「誰かのもの」だと思わずに、自分もその担い手だということ。そういう人が一人でも多く増えることが、博物館の存在意義を社会全体に共有できる唯一の道なのではないかと思っています。

【注】

1) 岩本通弥、菅豊、中村淳編著『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』（青弓社、2012）

人文系私設図書館Lucha Libroキュレーター、関西大学非常勤講師